

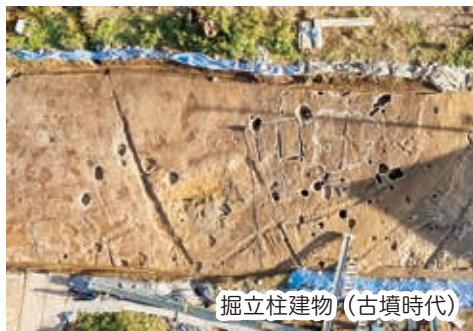


## 古墳時代の河跡から 大量の遺物が出土!

河跡の調査風景（北から）



河跡から出土した古墳時代の遺物



掘立柱建物（古墳時代）

矢田遺跡は、七尾南湾岸から約1 km 南側の水田地帯に位置する弥生時代～中世の集落遺跡で、今回の調査は令和3年度調査に続く第2次調査となります。

調査地の東西で確認した古墳時代中・後期の河跡2条からは、大量の土器をはじめ、<sup>くわ</sup> 鍬や<sup>すき</sup> 鋤などの農具や建物部材とみられる木製品が多数出土しました。これらとともに、刀や舟、鳥を模した木製<sup>まいししぐ</sup> 祭祀具が出土したほか、祭祀の後に廃棄された状態をとどめるような土器もみられるなど、河辺での祭祀を想起させる状況が各所で確認されました。

河跡の東側では、同時期の<sup>ほったてぼしら</sup> 掘立柱建物2棟も検出しています。河寄りの1棟は柱間約5 mを測り、検出面から約70 cmもの深さに柱の痕を明瞭に残す大型の建物です。今回の調査ではこのほかに、弥生時代後期のクリの貯蔵穴や、古代の水田跡がみつかりました。



R4 発掘調査

くらかきいせき し か まち  
倉垣遺跡 [志賀町]

倉垣遺跡は、羽咋郡志賀町の南東部で、のと里山海道の西山インターチェンジ近くに位置します。安津見川左岸の丘陵から平野部にかけて立地する遺跡です。発掘調査は一般県道羽咋田鶴浜線県単道路改良工事に伴って、旧加茂小学校跡地で実施しました。

調査区の北側では、古墳時代と思われる<sup>たて</sup>竪穴建物4棟と平安時代と思われる<sup>ほったてぼしら</sup>掘立柱建物1棟を確認しました。竪穴建物は方形のものが1棟と竪穴建物の外周溝が円形のものが3棟見つかりました。掘立柱建物は南北2間以上、東西1間以上を検出しましたが、全体の規模は不明です。

また、調査区の南側では、東側にある谷から流れ込んでいた河跡がみつかりました。河跡からは古墳時代中期・後期の土師器・須恵器が多量に出土しました。

調査区からは、縄文時代の打製石斧、弥生時代後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の須恵器、古墳～平安時代の砥石などが出土しました。



調査区遠景（北北東から）



竪穴建物・掘立柱建物（南東から）



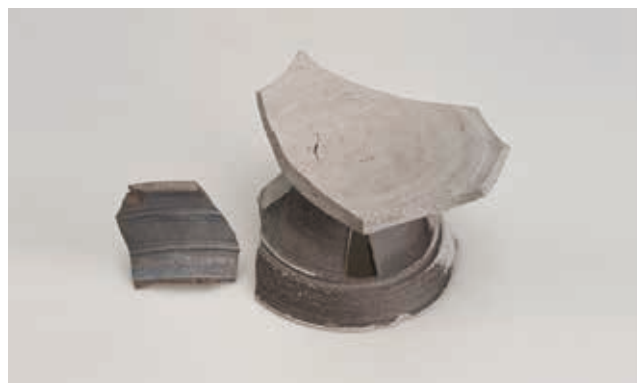
平安時代の掘立柱建物（北東から）



古墳時代の河跡（北東から）



河跡から出土した土師器高坏（南から）



河跡から出土した古墳時代の須恵器

## R4 発掘調査

おおば いせき かなざわし  
大場遺跡 [金沢市]

大場遺跡は、森下川<sup>もりもと</sup>下流の沖積平野に位置する集落遺跡です。昭和45年に県立金沢向陽高校校舎建設に伴って発掘調査が行われました。

今回の調査は、いしかわ特別支援学校高等部新校舎整備事業に伴って行われ、旧森下川や旧河北瀧に起因する氾濫・湿地堆積層<sup>はんらん</sup>を挟んで上下二面の生活面を確認しました。

第1面では室町時代（15～16世紀）の屋敷地を区画する溝から、当時の暮らしぶりを思いさせる多彩な出土品がみられました。また、平安時代から鎌倉時代（11～13世紀）の掘立柱建物、井戸などを検出しました。

第2面では古墳時代（6世紀）と奈良・平安時代（8～9世紀）の溝、土坑、小穴を検出し、土師器の小型壺や須恵器の坏・甕などが出土しました。

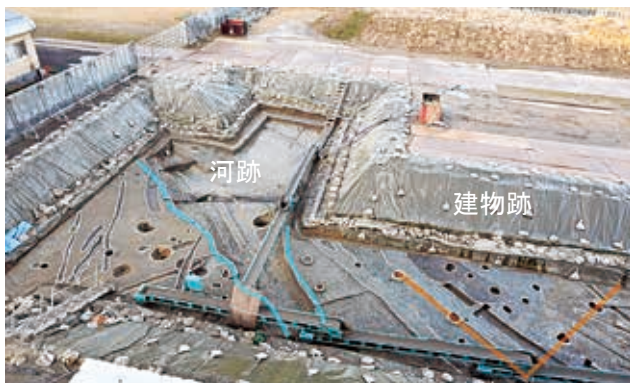
遺跡周辺は瀧水位の上下変化や旧森下川の氾濫などの影響で軟弱な地でしたが、氾濫の影響が小規模になり地盤が安定した平安時代以降、瀧湖の恵みや水運の利便性を生かし、沖積平野を開発していった集落の様子が明らかとなりました。



高校の敷地内に広がる遺跡（北から）



屋敷地を区画する溝（室町時代）



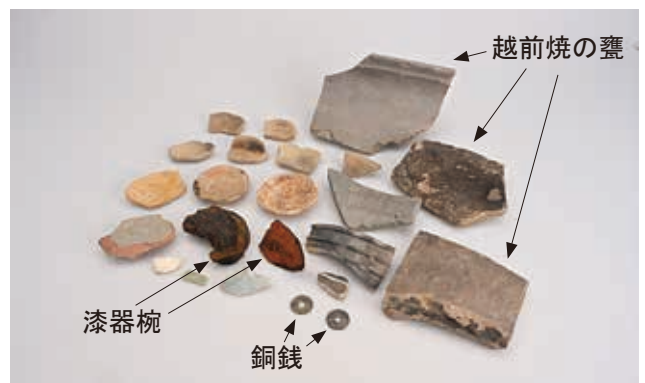
河跡に沿って建てられた建物（平安～鎌倉時代）



建物の柱痕が並んでいます（平安～鎌倉時代）



掘立柱建物の柱（平安～鎌倉時代）

越前焼の甕  
漆器椀  
銅銭

区画溝からみつかった多彩な出土品（中世）

講座 考古学最前線

『文化財をよりよく知るための技術活用—三次元計測と遺跡探査を軸に—』

令和4年12月10日(土)に石川県地場産業振興センターの新館コンベンションホールで開催しました。

今回は、近年発掘調査のみならず普及活動や災害復旧の場面でも利用されている三次元計測と遺跡探査の技術活用についての講座でした。

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長兼遺跡・調査技術研究室長の金田明大氏の講演は、遺跡探査の話から始まりご自身の発掘現場における失敗経験談を交えて地中レーダー探査の有効性を説明しました。また、自然災害によって損壊した古墳石室の解体・修復に役立った具体的な事例等を紹介しました。

三次元計測の話では、スマートフォンで撮影した画像から誰でも簡単に短時間で三次元データを作成することが可能であり、三次元化することで人の目では見落としてしまう土器の微細な凹凸などの情報を判別できるようになるため製作方法・工程等の復元ができるとのことでした。

一方で、三次元計測の活用は情報の共有という点で有効だが、専門的な知識を持った人の観察も重要であるから、合わせて使っていくことが大事であるとのことでした。実際の教育活動をとおして文化財や歴史を勉強するだけでなく、こうした技術活用がいろいろな学びのきっかけになればとの話が印象的でした。

当センター調査部の柿田祐司の関連報告は、県内での活用事例報告を行いました。金沢城鼠多門側壁石垣の調査では、出土した石垣石材の10分の1模型を3Dプリンターで作成し、石垣の復元に役立てたことなどを紹介しました。



講演の様子



金田氏の講演



柿田氏の報告

講座の動画は埋文センター公式チャンネルで視聴することができます。→



## R4 古代体験

## 古代体験学習講座 『須恵器づくり』

令和4年10月23日（日）に古代体験学習講座「須恵器づくり」を行い、陶芸未経験の方を含めて17名が参加しました。

今回の講座では、最初に須恵器の歴史や作り方について学び、職員による製作実演を見学しました。その後、県内の遺跡から出土した須恵器をモデルとして、「杯」や「双耳瓶」などの作品を、研究により復元された古代の技法で製作しました。陶芸未経験の参加者の方は、初めての道具やロクロの使用に苦労していた様子でしたが、それぞれ納得できる作品を作り上げていました。また、何度か体験されている方でも現代の陶芸とは異なる技法に苦戦しながら作品を製作していました。

製作した作品は、1ヶ月ほど乾燥させ、職員が製作した須恵器と「古代の文房具づくり（10月24日～11月6日実施）」の作品と合わせて、埋蔵文化財センターにある「復元古窯」に窯詰めを行いました。窯詰めした作品は、11月15日（火）から18日（金）の日程で、薪を燃料に約70時間かけて、しっかりと焼き上げました。最終日には、1,200℃を超える高温で焼成し、最後に窯を閉じて空気を遮断した還元状態として、須恵器の特徴の一つである青灰色で固くしまった焼きあがりを目指しました。その後、窯が冷めるまで1週間待ってから窯出しを行いました。

今回焼き上げた作品は合計で341点で、令和4年12月10日（土）～令和5年1月9日（月・祝）の期間、当センター本館ホールで作品の展示と返却を行いました。



ガイダンスの様子



須恵器の整形



作品の仕上げ



窯焼き作業



焼き上がり



展示風景

R4 古代体験

古代体験ミニ講座『土偶づくり』

令和4年11月27日(日)に古代体験ミニ講座「土偶づくり」を開催し、午前と午後の2回あわせて29名が参加しました。

今回の講座では、職員による土偶の説明の後、体験者は金沢市米泉遺跡出土の縄文土偶をモデルにした土偶づくりを行いました。最初に粘土板を作り、型紙を元に土偶の輪郭を切り出した後、見本や写真を参考にして頭や腕、胴体など各部位の微妙なカーブをつけました。そして最後に、体全体に表現された不思議な文様を、描いた順序を考えながら丁寧に付ける作業を行いました。

体験者の皆さんが製作した作品は、しっかりと乾燥させた後に焼成し、令和5年1月10日(火)から当センター本館ホールでの展示と返却を行いました。



作り方の説明



土偶の整形



道具で文様付け

R4 古代体験

古代体験ミニ講座『剣づくり』

令和5年1月15日(日)に古代体験ミニ講座「剣づくり」を開催しました。午前と午後の2回に小学生から一般の方まで幅広い年齢層の方々あわせて30名が参加しました。

体験者は、講座の最初に金属器の歴史や金属加工に関する説明を聞き、実際に金属を溶かして型に流し込む「ちゅうぞう鑄造」を見学しました。その後、それぞれの作品製作を行いました。

今回の剣づくり講座では、工具を使った金属の切断や研磨という作業があり、体験者の皆さんは製作に苦勞しながら、黙々と作業を進め、講座修了時にはとても綺麗な、光り輝く素敵な剣を作り上げていました。



鑄造の説明



余分な部分をカット



仕上げのつや出し

## R4 古代体験

『<sup>もっかん</sup>木簡年賀状づくり』

令和4年11月26日(土)～12月11日(日)の期間に体験コーナーを設けました。

木簡とは、奈良・平安時代、貴重な紙の代用品として文字を書くために使われた木の板です。耐久性に優れ、刃物で削ることで書き直しや再利用が容易であり、役所の連絡文書の他、品物の荷札としても広く使われていました。

当時の役人は、木簡に書き込む筆と書き損じた際に削り取る<sup>とうす</sup>刀子が必需品とされており、「<sup>とうひつりの</sup>刀筆吏」とも呼ばれていたそうです。

また、木簡には、長方形や先をとがらせたものなど様々な形と大きさがあります。荷札に使われていたものは、上下の端に切れ込みがつけられ、紐がかけやすいようになっています。

体験者は、実際に年賀状として使用出来る板に、墨と筆で思い思いのメッセージやイラストを書き添え、完成した年賀状を手にして満足そうに微笑んでいました。



製作中



完成！



金沢市畝田ナベタ遺跡出土の木簡

## R4 古代体験

『<sup>こま</sup>古代の独楽づくり』

令和5年1月4日(水)～1月9日(月・祝)の期間に、体験コーナーを設けました。

日本最古の独楽は、約1,300年前の藤原宮跡から出土しています。それは、広葉樹の心持材を<sup>えんすい</sup>円錐形に削って、布を巻き付けた<sup>むち</sup>鞭を使って<sup>たた</sup>回転させる「叩き独楽」と呼ばれるものです。当時は、独楽の発音が「<sup>こま</sup>胡魔」と同じであることから、鞭を打つことで鬼を払うと考えられていたようです。また、朝鮮半島の高麗を経て伝わったことが名称の由来ともいわれています。

県内では、羽咋市大町ダイジングウ遺跡から室町時代のものが出土しています。

体験者は、削った独楽に色模様をつけたり、鞭となる布編みに苦労したりしながら出来上がった独楽を一生懸命に回して楽しみました。



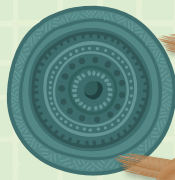
製作中



回してみました！



羽咋市大町ダイジングウ遺跡出土のコマ



# まいぶん日誌

令和4年  
(2022)

令和5年  
(2023)

11月～2月



11月

第1回ホール展開始

消防訓練を行いました



テーマは  
「縄文時代の米泉遺跡」



万々に備えます

小学生の施設見学



「須恵器づくり」「文房具づくり」  
作品の焼成開始

「第3回まいぶん考古学講座」  
“石川県の縄文土器と石器について”

こんな大きな土器は何に使ったの

みんな並んで点火式！



講座「土偶づくり」  
久しぶりの企画です



須恵器作品の品評会です



三次元計測と遺跡探査の  
最新成果を学びます

12月



冬に備えて  
移設古墳にシート掛け



「考古学最前線」！

12月最後の講座は  
「馬形はにわづくり」

1月



作品をロビーに並べました

講座「剣づくり」



せいかつー！

職員研修会 九谷焼を学びます

2月



協力してガラス玉を作ります

講座「弥生の玉づくり」



発掘報告会  
「いしかわを掘る」

県内の発掘成果が報告されました！